

一、環境と立地

九州南部から台湾にいたる海域に飛石のように連なる島々は南西諸島と総称され、それらは3つの文化圏を構成している。沖縄諸島は奄美諸島とともに中部圏に属し、九州本土からは約550km離れ、北緯26～27°の間に位置する。このような地理的位置から、沖縄は日本本土にはない環境「亜熱帯」に属し、島の地形、地質、土壌、生物などに特有の要素が認められる。

沖縄本島の平均気温は最も高い7月で27～29℃、最も低い1月で15～18℃である。降水量は年2000mmを越える多雨地域に位置し、梅雨期と台風期にもたらされる雨量が多いことが特徴である。植物相は非石灰岩地域においてはリュウキウアオキースダジイ群団、石灰岩地域ではナガミボチョウジークスノハカエデ群団として分類されている。動物相は沖縄が日本で最も古い時期に大陸から隔離されたため、海を越えて移動できない生物に固有種が多く、ノグチゲラやヤンバルクイナなどはその例である。

沖縄本島は南北約130km、幅約10kmの島であるが、その地形は南と北で大きく異なっている。北部は山岳地帯で山原（ヤンバル）の異称をもつ。脊梁部には海拔300～500mの山山が縦走し、山地に続く平坦性の強い台地は典型的な海岸段丘のそれである。南部は琉球石灰岩の被覆が見られ、そのほとんどが海拔200m以下の丘陵地、台地、低地である。

北谷城の所在する北谷町は沖縄県中部に位置する。町の南部は北谷田圃（ターブックワ）と称される沖縄屈指の水田地帯であり、北部には水田のほか畑地が開け、東部は丘陵地で山林資源が豊富であった。しかし、沖縄戦により町内は破壊しつくされ、大部分の土地が軍用地として利用された。現在も町の大部分が米軍基地として接収されており、その面積は65%に及んでいる。今回調査した北谷城も米軍基地中に位置している。

北谷城は東シナ海に注ぐ白比川に沿って海岸方向へ伸びた琉球石灰岩の舌状台地上に立地している。白比川を隔てた北側の小丘陵は池グスクと呼ばれており、北谷城の出城としての機能を有していたと考えられている。グスクの占有する丘陵斜面のうち南東、西、及び北側は断崖であり、南西側のみやや緩やかであるため、かつてのグスクの追手であったとみなされている。丘陵の東側の頂部は削平され、そこからグスクに向かってスロープ状に道が伸びている。また、グスクが機能していた時代の浜堤を現在国道58号線が走っており、その西は直ちに海であったことから、このグスクが接近困難な要害であったことがう



第1図 沖縄本島グスク分布図

かがえる。

沖縄は歴史の上でも日本の中心部を遠く離れ、九州本土からも海に隔てられていたために日本の政治権力が及ばず琉球国と称する小国家として独自の文化圏を構成していた。この間、沖縄の各地には按司と呼ばれる支配者が出現し、近隣のものとは勢力を拡大していた。グスクはこの按司の居城とされている。

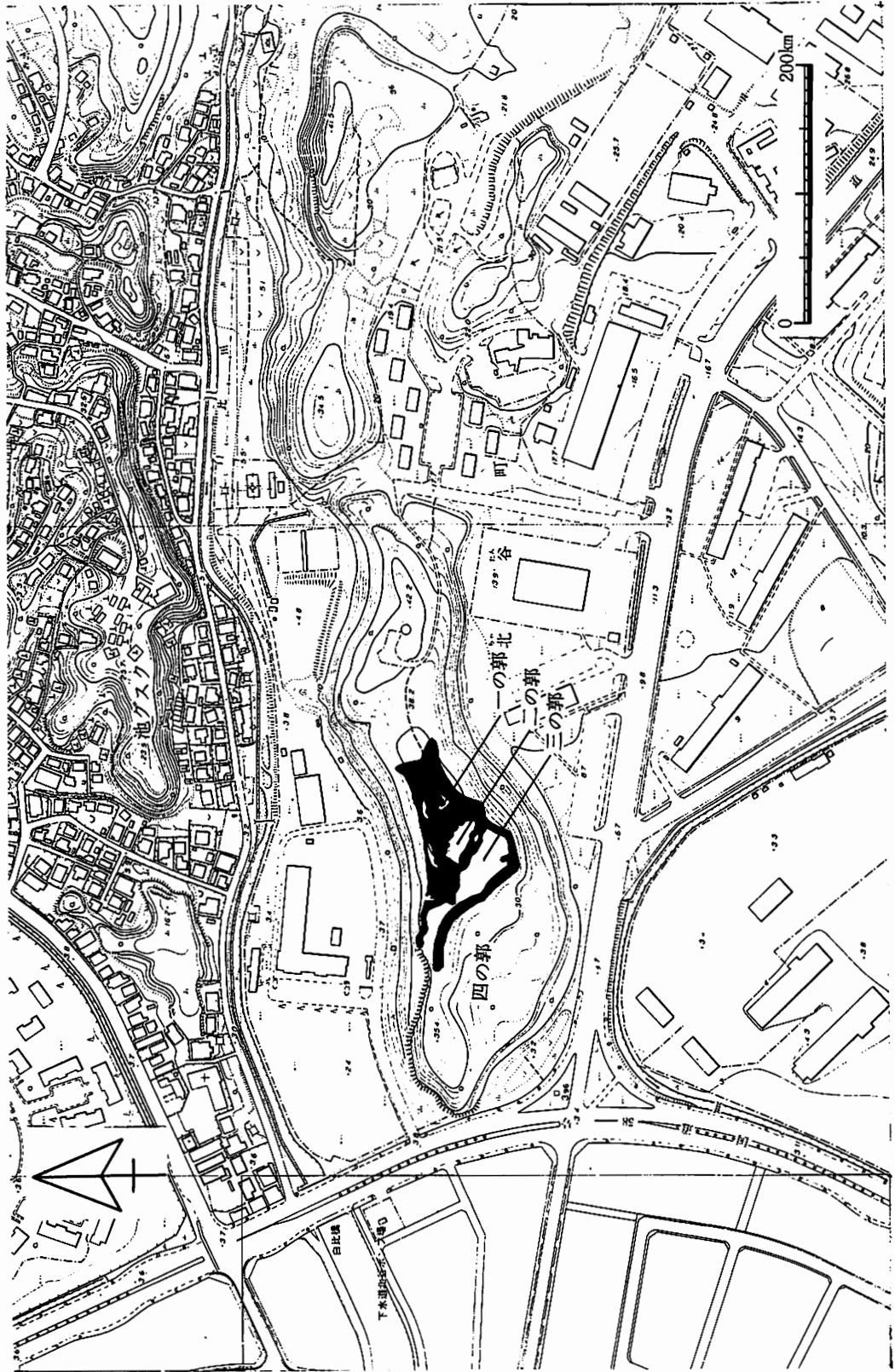
しかし、グスクには按司の居城とは一概に言い切れぬものがあると言われている。石垣を持たないもの、あっても貧弱すぎるものが見受けられるため、その性格については支配者の居城説の他、聖域説、集落説など幾つかの説がある⁽¹⁾。また、石垣が構築されているものでも、初期のものは野面積み、近世になると切石積みが増加するなど構造上にも差が現れ⁽²⁾、時代とともに変化していることが分かる。

今回調査した北谷城は野面積みと切石積みを併用した石垣をもち、その規模は東西約160m、南北約70mである。この範囲内に4つの区画が存在し、現在、地形的に高い東から順に一の郭、二の郭、三の郭、四の郭と仮称されている。このグスクの興亡についての明確な資料はないが、金満按司や大川按司の居城と伝えられており、丘陵周辺の崖下には金満按司のものとされる自然洞穴を利用した墓がある。

自然地形を巧みに利用したグスクの各所には琉球石灰岩が露出し、巨大な岩盤と岩盤との間を人工の石積みでつなぐことによって石垣を構築している。これらの石垣の一部には切石加工が施されているものも見受けられるが、大部分の石垣はすでに崩れ落ちてほとんど原形を留めていない。一の郭および二の郭北側には石灰岩の露頭がかなり見られ、その間に石が並べられており、それらに囲まれた小さな平場が不規則に形成されて神秘的な雰囲気漂わせている。一の郭と二の郭の境をなす石垣もまた石灰岩の岩盤と人工の石積みとの組み合わせによって築かれており、両郭間に3mに及ぶ高低差を現出しているが、二の郭と三の郭との境の石垣はすべて人工の石積みである。これらの石垣によって囲まれた二の郭の中心部はほぼ平垣で、前回までの調査により、ここから敷石遺構や舎殿址、円形の柱穴などが検出されている。また、三の郭は現在畑地として利用されているが、御獄（ウタキ）の存在する可能性が指摘されている。三の郭から四の郭へいたる道はノロ道と呼ばれ、両側に石垣が連なっており、祭祀の時には馬に乗ったノロがここを通過して三の郭へ入り、様々な行事を執り行ったと言われている。 (大和)

註(1) 宮城 栄昌・高宮 廣衛編『沖縄歴史地図〈考古編〉』 柏書房 1983年

註(2) 沖縄県教育委員会編『沖縄グスク分布調査報告書—沖縄本島及び周辺諸島—』1983年



第2図 北谷グスク周辺の地形図



第3図 地形測量図

二、調査の目的と経過

北谷城の発掘調査は、1984年に第一次調査⁽¹⁾が行われてから、これまでに5回にわたって調査が実施され、今回は第6次調査にあたる。第6次調査は、熊本大学考古学研究室が担当し、1990年7月13日から24日まで12日間にわたって実施した。

第5次調査の際には、Z-100・101グリッドで石垣の根石が検出され、二の郭の範囲が明確になり、V-100・101グリッドでヒンプン⁽²⁾状の遺構が確認された。沖縄のグスクの性格上、この遺構に続いて門ないしは出入り口の存在が考えられるため、今回の調査は、付近の遺構の状況をより明確にしながら出入り口の有無を確認し、その構造を明らかにすることを目的に実施された。発掘調査と並行して測量調査を行い、二の郭を中心にして、一の郭から三の郭まで実施し、50cmごとに等高線を記入して、微地形を把握できるように努めた。

調査区には、第5次調査までと同様に2m×2mのグリッドを設定し、北から南へA、B、C……の符号を、東から西へ1、2、3……の符号を付した。今回は、VからZ、96から101までの範囲で計14グリッドを発掘した。

出入り口確認のための発掘調査は、二の郭側及び三の郭側の二方向から行った。二の郭側では、X-99グリッドを中心に、V-99・100、W-100、X-100・101の各グリッドについて掘り下げた。三の郭側からは、X-96・97・98、Y-96グリッドを発掘した。W-98・99、X-98・99グリッドの広い範囲にわたって木の根が伸び、出入り口の構造を把握するのに困難をきたすために、W-98・99グリッドを北側に1m拡張して発掘した。Y-99、Z-99グリッドでは、石積みが三の郭方向に突出した形で見られるので、二の郭と出入り口との関係を確認するために発掘調査を行った。また、前回の調査で検出された石垣の外周の根石列を追うために、Z-100・101グリッドを再発掘し、石垣の根石が北西側に延長することを確認しながら、X-99、Y-101グリッドを発掘した。 (大田)

註(1) 北谷町教育委員会「北谷城—北谷城第一次調査—」1984年
北谷町教育委員会「北谷城展」1989年

註(2) 沖縄列島の民家において、門の内側、母屋の前面に設けられる石造の目隠し。
(「建築大辞典」彰国社 1973年)

三、層序と遺構

層序

二の郭、三の郭の平坦面はどちらも旧畑地であり、比較的単純で均一な層序をなしているが、石積みの残る部分は、その基礎固めや、斜面及び平坦面造成のための客土が見られ、かなり人為的な層構成をなす。以下に、調査の過程において上下関係の明らかになった基本層序を列挙する。なお、今回の調査では遺構検出面までの掘り下げにとどめ、土層自体の厚さ、広がりについて不明な点は今後の調査にゆだねることとした。

I層 軟質の黒褐色土。畑地耕作放棄後の腐食土層であり、前回調査のI層である。

IIa層 粘性のある褐色土。主に崩れた石積み部分の礫に混って見られ、三の郭のX—96、Y—96グリッド付近の平坦面及び二の郭の平坦面では検出されなかった。乾燥すると硬化する。

IIb層 大きき10cm前後の石灰岩の角礫とIIa層の褐色粘質土からなる混土礫層。石垣上に50cm前後の厚さをもって堆積しており、その周辺部においても崩れた石積みの礫群との混在が見られる。I、IIa層とともに攪乱層である。

III層 粘性のある黒褐色土。石灰岩や貝殻の細片を多く混入する未攪乱層で、二の郭におけるグスク時代の遺物包含層である。前回調査のIII層に相当し、二の郭のW—100、X—100グリッドで検出された石列はこのIII層上面に据えられている。

IV層 粘性のある黒褐色土。Y—99、Z—99グリッドにおける張り出し状の地形を構成している土層である。色調、粘性及び石灰岩や貝殻の細片を混入する点で、二の郭のIII層によく似ているが、やや黒みが強く、この部分においてのみ検出されることより、客土として捉えるのが適当と思われる。なお、この上面よりいわゆるグスク土器が検出されている。

V層 黒褐色土。色調はIII層に似ているが、粘性に乏しい。二の郭の石垣外周の根石が据えられている部分とその付近でのみ検出され、石垣の基礎固めに持ち込まれた客土と考えられる。X—99グリッドにおいてはこの上面よりグスク土器が検出されている。

VI層 やや粘性のある褐色土。VIII層、即ちマーチ層の赤褐色の粒子、炭、石灰岩の細片が含まれる。X—97・98グリッドにおけるテラス状の平坦面及びその南西方面に続く緩斜面を形成している土層である。この部分においてのみ検出され、二の郭、三の郭では見ら

れなかったことから、このⅥ層もⅣ、Ⅴ層と同様客土と考えられる。

Ⅶ層 粘性の強い褐色土による無遺物層。Ⅵ層よりやや明るい色調を示す。堅く締まっており、貝殻、小石などはほとんど含まないが、サンゴの細片を少量含む。

Ⅷ層 粘性の強い赤褐色土からなる地山層。Ⅶ層同様、堅く締まっており、貝殻、小石などはほとんど含まないが、サンゴの細片を少量含む。いわゆる島尻マーチ土壌である。

遺構

今回の発掘調査は、第5次調査までの調査結果を踏まえて、二の郭と三の郭の間の門あるいは出入り口の存在を確認することを第一の目的として行った。結果としては、出入りに関連する可能性の強い配石状況を確認するとどまり、直接門の存在を示すような遺構は検出されなかった。しかし、第5次調査で検出された、二の郭東側の根石列から続いて北西に延びる新たな石列が確認されたほか、W-98、X-97・98・99グリッドにおいてはこの根石列から南西方向に向かって人為的に造成されたと思われる傾斜面と平坦面が、さらに、Y-99、Z-100グリッドでは同様に根石列から南西方向に延びる張り出し状を呈した性格不明な遺構が検出された。

第5次調査で、二の郭南側（Y-100・101・102・103グリッド、Z-100・101・102グリッド）に石垣の根石列が検出されたが、今回の調査では、これとつながる根石列がW-99、X-99グリッドで確認された。この一連の根石列は、すべてⅤ層に据えられている。根石に使われた石は、長さ20～40cm、幅30～50cm程の石がほとんどであるが、中には長さ80cmに達する石が用いられており、特に、根石列のカーブする部分では、このような大きな石をカーブに合わせて削り、滑らかな曲線を描き出している。一連の根石列であるが、Z-100グリッドに見られる根石からX-99グリッドの木の根に隠れている石まではすべて石灰岩であるのに対し、その石より北西側に用いられている石は、すべてサンゴ石である。前者に比して後者の加工はより丁寧であり、各稜ともきちんと削り出され、その大きさも長さ25～35cm、幅30～40cmに取り揃えてある。根石上面のレベルも、すべてが同じではなく、X-99グリッドにある3個の根石の中央の石より北西側に連なる石垣根石列上面のほうが、その石より南東側に続くそれよりも15cm程高い。W-99、X-99グリッドの石垣外周の根石、及びその周辺部分では、Ⅰ、Ⅱa層が見られ、さらに根石の上にだけⅡb層が確認された。

W-99・100、X-99・100グリッドでは、石垣外周の根石列から内側、すなわち二の郭

側に 1.5m 程の間隔をもって石垣内周の根石列が検出された。この石列は第 5 次調査で確認されたものであるが、同じく第 5 次調査で確認された Y-100・101 グリッドの石垣内周の根石列、さらに、S-98、T-99、V-99 グリッドに見られる石列と一連の並びを成している。この石垣内周の根石列はすべて二の郭側に面を揃えて並んでいるが、石垣外周の根石列と同様に、用いられた石の石材や面の加工の施され方は一様ではない。W-100 グリッド南隅より南東側の根石列は、粗い面取り加工を施された長さ 20~50cm、幅 40~60cm の石灰岩が並ぶが、一方、北西側では長さ 30cm、幅 30~40cm 程のサンゴ石が用いられ、これらの石はより丁寧に加工されており、その稜はシャープである。この W-100 グリッド南隅より北西側に連なる根石列の石は、石垣外周のサンゴ石からなる根石列と、石材や大きさ、加工の施され方が同様である。また第 5 次調査では、V-99 グリッドのほぼ中央部から、二の郭内の東南方向へ延びるヒンプン⁽¹⁾状遺構の石列が確認されているが、V-99 グリッドのほぼ中央部より北西側に連なる根石列の石の大きさや加工の施され方は、このヒンプン状遺構の石列の石とも非常によく似た様相を呈している。W-99 グリッドの一部と X-99 グリッドにおいて、この石垣内周の根石列と石垣外周の根石列の間に、幅 1.5m 程の平坦面が形成されている。この平坦面には、ほぼ全面に石が置かれており、その石材はサンゴ石が数個用いられている他はすべて石灰岩である。これらの石の大きさや形は様々であり、石灰岩 1 個を除いてとり立てて加工も施されておらず、特に規則性をもって配列されている様子も見られない。この平坦面は、石垣外周の根石列よりもやや低く石垣内周の根石列とほぼ同じレベルである。この平坦面を形成している石はひどく磨滅し、すべてがⅢ層に座った状態で検出された。また、この部分ではⅡb 層は検出されなかった。

Ⅱb 層は石垣上及びその周辺部にのみ見られ、グスク土器や褐釉陶器、青磁、染付等が出土している。これらの遺物は、すべて Y-99 グリッドの石垣外周の根石外縁から出土しており、石垣上からの出土はなかった。石垣の築造については座喜味城跡の調査で詳しく述べられている⁽²⁾。座喜味城の城壁は、未加工の石灰岩を基盤としその上に加工石を積み上げ石垣の内・外表面とし、その内部に裏込めとして礫を詰め込んでおり、土を構築材として用いてはいない。Ⅱb 層は角礫と土から構成されているが、その土も構築材として角礫と共に用いられたのか否かについては、沖縄のグスクに類例を見ることができず、今回の調査では判明しなかった。一方で、このⅡb 層が後世の畑地耕作の為に除去され、放棄された土砂や礫が根石の上に積み上げられたものである可能性も否定できない。仮に、Ⅱb 層中の角礫を石垣の構築材としてとらえた場合、Ⅱb 層の見られた石垣外周、内周の根

石列がそれぞれW-99グリッドの木の根を境に、また、W-100グリッド南隅を境にして石材や石の大きさ、面取り加工に違いが見られるものの、これら一連の根石列は共通してⅡb層に覆われており、ほぼ同時期に築かれたものと考えられる。しかし、ここで見られた石材等の違いが何によるものかについても、今回の調査では判明しなかった。

当初、W-99グリッドの一部とX-99・100グリッドにおいて検出された平坦面が、グスクに伴う門ではないかと考えられたが、柱穴や礎石等、積極的に門の存在を示す資料は見当たらなかった。この平坦面を形成している石は磨滅がひどく、しっかりと土中にはまり込んでおり、この上を人が常時歩いた時期のあったことを示している。また、根石上に見られたⅡb層がこの平坦面からは検出されなかったことを考え併せてみても、その時期についてははっきりしないが、この平坦面がかつて通路として利用されていたことは確実である。

W-98、X-99グリッドにおける石垣の根石の据えられているV層上面からは、南西方向に向かって比較的急な傾斜面となり、X-98グリッドにおいてテラス状の平坦面になる。さらに、この平坦面より南西方向は、緩やかな斜面となって三の郭の平坦面へと続く。根石の据えられている面から傾斜面にかけて、木の根による攪乱部分を挟んで北側のW-98グリッドでは、傾斜面全体にV層の黒褐色土が見られるが、木の根の南側にあたるX-99グリッドにおいては、根石の付近にのみV層が見られ、傾斜面はⅥ層の褐色土からなる。しかし、この傾斜面から続く平坦面は均一にⅥ層からなり、このⅥ層は平坦面から続くX-97グリッドの緩斜面を形成し、三の郭の平坦面では検出されなかった。木の根の北側、W-98グリッドにおける傾斜面には、V層上面にサンゴ石が散在するが、その中の幾つかは面を削り出してあり、上面を平坦に揃えた様子が見受られる。これらの加工されたサンゴ石は、一見、階段状を呈していたかに見えるが、乱れがひどく、現状では階段と断定するには至らなかった。このW-98グリッドにおける傾斜面とテラス状平坦面との境付近には、サンゴ石、石灰岩礫が大きさはまちまちながら列をなして並び、傾斜面を形造る際の土留めであったとも考えられる。木の根を挟んで南側、X-99グリッドにおける傾斜面にも、大小の石灰岩礫が数個、南西方向に面を揃えて並ぶが、前述したように、W-98グリッドと異なり、V層は根石の付近でしか検出されず、これらの石灰岩礫はⅥ層上面に見られる。また、X-99グリッドにおける傾斜面とX-98グリッドのテラス状平坦面との境には、拳大から人頭大の石灰岩礫、サンゴ石が集中しており、この点ではライン状に石が並んでいたW-98グリッドとは様相を異にする。

このW—98、X—99グリッドにおける傾斜面から続くX—98グリッド付近のテラス状平坦面においては、ほとんど石は見られず、一様にⅥ層の褐色土が広がる。このテラス状平坦面は、根石列とほぼ並行に北西方向にさらに広がることが予想される。

さらにX—97グリッドにおいては、このテラス状平坦面から続く緩斜面となって三の郭の平坦面へ下っていくが、この緩斜面には、大きさ10cmから20cm前後の無加工の石灰岩礫、サンゴ石がⅥ層上面に見られ、石の配置に一定のリズムがあるように想定できるが明確ではない。このⅥ層は、緩斜面が三の郭の平坦面へと続くあたりで見られなくなる。また、X—97グリッドに散在する礫は、三の郭の平坦面では全く検出されなかった。

この石垣の根石から続く傾斜面、テラス状の平坦面及び緩斜面となって下ってゆく地形は、すべて客土と考えられるⅤ層及びⅥ層からなり、一様にⅠ、Ⅱa層によって覆われていた。これら一連の地形は、何らかの目的をもって人為的に造成されたと考えられるが、今回の調査ではその目的及び造成された時期について明らかにすることはできず、将来一層の調査区域の拡大が必要である。ただ、石垣部分の説明で述べたように、X—99グリッド付近の部分が石垣構築当初からの出入り口である可能性は低く、もしこの一連の傾斜面及び平坦面を当初からの出入り口であると仮定するにしても、その構造は根石等の配石状況に比較して格段に脆弱であると言わねばならない。

Y—99、Z—99グリッドにおいては南西方向に向かって根石列から直角に延びる石灰岩の石列が検出された。この石列の石灰岩礫は20～30cmの大きさで、そのほとんどが加工の施されていない自然石であり、その並びも不規則である。また、これより北側、X—99、Y—99グリッドの境付近においても、南西方向に向かって根石列から直角に延びる数個の石灰岩礫が認められ、この二つの石列に挟まれた部分は根石の据えられているⅤ層上面より一段高くなっており、この石列とⅣ層によって、根石から南西方向に延びるいわば張り出し状の地形を構成していると考えられる。このⅣ層は、石灰岩や貝殻の細片を多く含み、粘性が強い点でⅤ層と区別され、むしろ二の郭の平坦面におけるⅢ層によく似ている。この張り出し状の地形には、多くの人頭大の石灰岩礫がⅣ層中に深く入っており、その上面はY—99グリッドにおける根石列の上面より5cm程低く、Ⅰ、Ⅱa層及び根石と接するあたりではⅡb層が厚く堆積していた。この張り出し状の地形は、さらにY—98グリッドに向かって南西方向に延びると思われたが、調査を進めるに従って、西側部分が急激に落ち込んでいることが確認された。しかしこの落ち込みは、その状態から見て、本来、Y—98グリッド側まで延びていたものが北西方向に向かって崩れたものと思われる。

この張り出し状の地形については、その石列の並びに人為的なものがうかがえ、またこのⅣ層が客土として捉えられることから、石垣に付属する何らかの遺構と考えるのが適当と思われるが、その性格については不明である。ただ、他のグスクにおいても、石垣構築後に付加されたと思われる性格不明な遺構の検出例があり、類似遺構の増加を待てばこの張り出し状の地形に対する解釈も可能であろう。またその時期については、この張り出し状の地形が、石垣の根石の基礎固めに持ち込まれたⅤ層上にあり、しかも根石部分と同様にⅠ、Ⅱa、Ⅱb層によって覆われていること、また、この張り出し状の地形を構成するⅣ層が、二の郭におけるグスク時代の遺物包含層であるⅢ層とよく似ており、ここから持ち込まれた客土である可能性があること、さらに、このⅣ層上面よりグスク土器が検出されたことなどを考え併わせると、石垣の構築された時期とほぼ同じか、また、それより下るにしてもさほどの時期差はなかったものと考えられる。(市川・水上)

註(1) 7頁 註(2) 参照

註(2) 読谷村教育委員会「国指定史跡 座喜味城跡 環境整備事業報告書Ⅲ」1986年

四、出土遺物

1. 磁器 (第4・5図 図版9・10上)

今回の調査で得られた磁器は総数約130点であるが、表面採集資料・Ⅰ層出土資料が大部分で、遺構に伴うものはごく少数であった。すべてが残欠で、原形に復元できたものはない。青磁を主とし、白磁・染付が少数みられる。以下、その種類ごとに説明する。

青磁 (第4図、第5図19～22・24・27)

器種別では碗が最も多く、盤・皿がこれに続き、酒会壺が1点検出された。

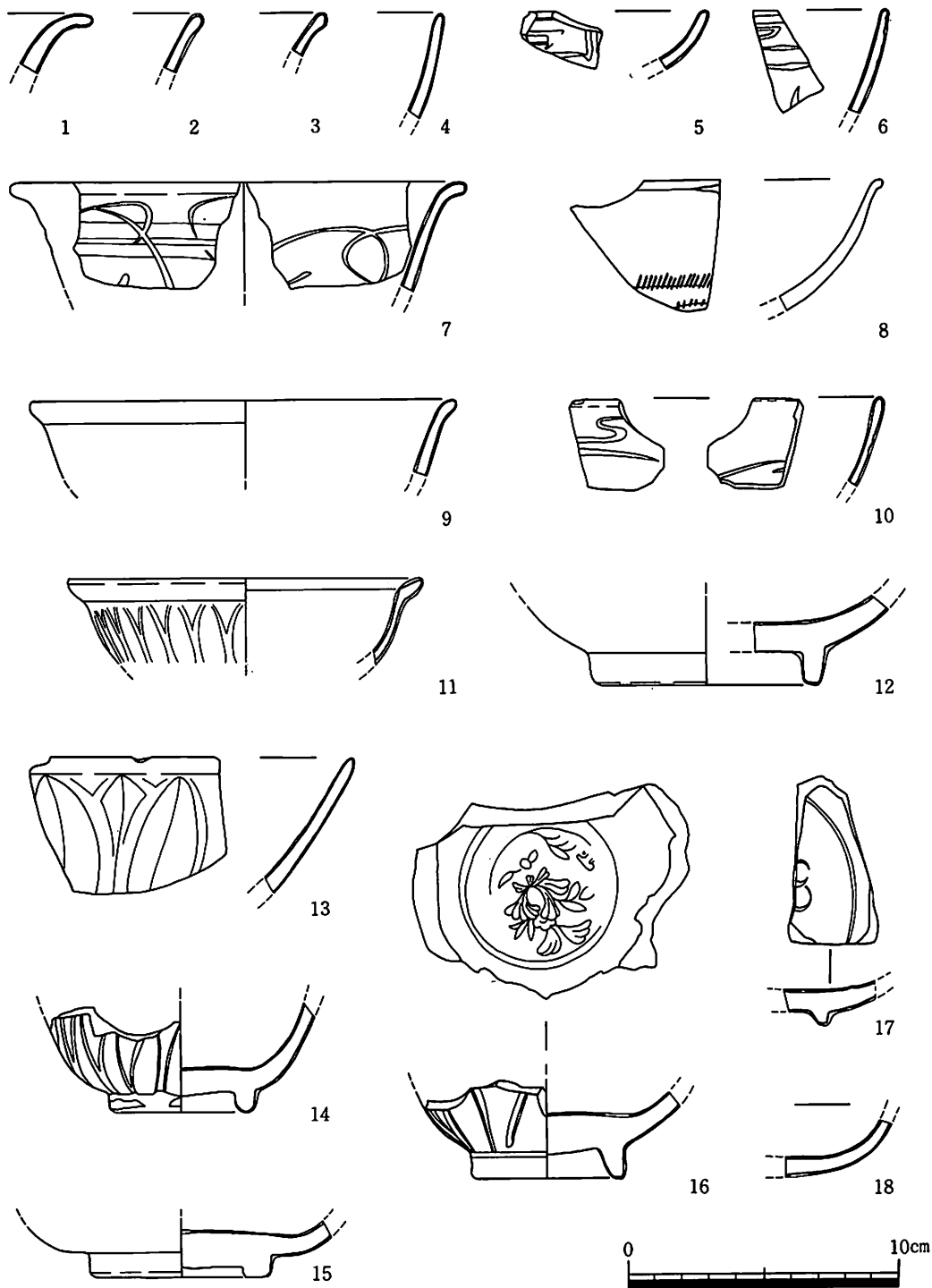
(1) 青磁碗 (第4図1～14・16)

口縁部は、その形により、次の3つに分類される。

A：外反するもの B：直口のもの C：膨らみをもつもの

A (第4図1・7～9・11)

1は無文で、内外面に粗い貫入をもつ。胎は淡黄色、釉は灰オリーブ色を呈する。7は外面にろくろ痕を残し、内外両面に篋彫りの文様をもつ。内面に粗い貫入をもち、胎は灰



第4図 青磁実測図

表採：7・10~14 W-98グリッド I層：16

X-98グリッド I層：2・4 II a層：3

X-99グリッド I層：5・8 II a層：15・18

Y-99グリッド II b層：1・9 Z-99グリッド III層：17

白色、釉は淡黄色を呈する。8の口縁は玉縁状を呈し、胴部下方に胴を巡る櫛描きの文様をもち、下部は露胎となる。胎は灰白色、釉は青みを帯びた灰白色を呈する。11の口縁は「く」の字形で、やや粗笨な篋削りの蓮弁文をもつ。胎は白色、釉は淡緑色を呈する。

B (同図4～6・10・13)

5・6は共に篋削りの文様をもち、両者とも胎は灰白色、釉は前者がオリーブ灰色、後者が淡青色である。10は口縁部付近が厚くなり、内外両面に暗文風の篋彫りの文様をもつ。胎は灰白色、釉は淡青色である。13は明確な篋削りの鑄蓮弁文をもち、胎は灰白色、釉は淡緑色である。

C (同図2・3)

口縁断面は、2は丸みを帯び、3は少し角張った感じで膨らむ。それぞれ胎は淡黄色、灰白色、釉は緑灰色、暗緑色を呈する。

底部は、高台の形により、次のように分類できる。

D：直立するもの E：裾開きになるもの

D (同図12・14)

12は高台を含む底部と胴部の胎色が異なる。前者が淡黄色、後者が灰白色である。製作過程に何らかの差異があると思われる。高台は削り出しによる成形で、外底のみ露胎である。釉は灰緑色を呈する。14の高台は畳付部分が丸みをもち、外面に篋削りの蓮弁文をもつ。高台には釉がいきわたっておらず、胎の露出した部分がある。胎は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

E (同図16)

外面に篋描きの蓮弁文、見込みに篋描きの花文をもつ。外底のみ露胎で、胎は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。

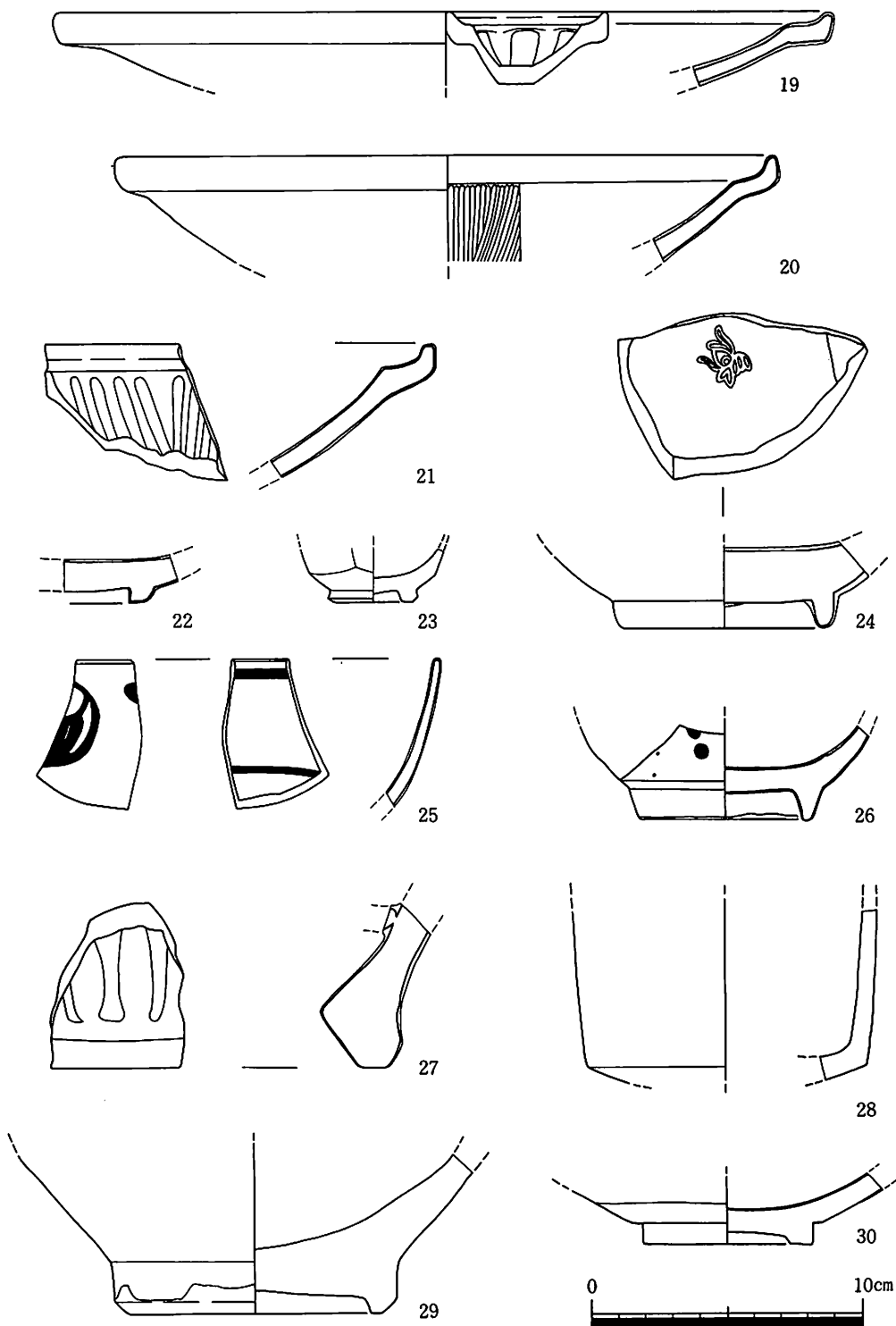
(2) 青磁皿 (第4図15・17・18)

ここでは、底部片3点のみを示した。

15は見込み外縁に沈線による円圈が巡り、粗い貫入をもつ。胎は灰色、釉は灰白色を呈する。17は高台内部が斜めに立ち上がり、見込み外縁に突線の円圈が巡り、内部に印花文をもつ。外底にドーナツ状の露胎部分があり、胎は灰白色、釉は暗緑色を呈する。18は畳付、高台内壁、外底が露胎で、胎は灰白色、釉はオリーブ白色を呈する。

(3) 青磁盤 (第5図19～22・24)

19～21は共に鋸状口縁をなし、蓮弁文をもつ。19は幅広の、20は細い篋を使用し、21は



第5図 青磁・白磁実測図

表採：27～29 W-98グリッド I層：19・24

X-98グリッド I層：22 Y-99グリッド II b層：25・30

W-99グリッド II a層：26 Z-100グリッド III層：21

蓮弁文が幾つかのまとまりをもって並ぶ。19・20の胎は灰白色、21は淡黄色、釉はそれぞれ灰青色、淡緑色、黄褐色を呈する。22・24は底部で、22は高台内部が斜めに立ち上がる。24は見込みに印花文をもち、外底の釉は掻き取っており、外底のみ露胎である。胎は22が淡黄橙色、24が灰白色、釉は22がオリーブ黄色、24が明緑色を呈する。

(4) 酒会壺 (同図27)

外面に篋削りの蓮弁文をもち、底部は露胎である。胎は灰白色、釉は明緑色を呈する。

白磁 (同図23・28～30)

23は鑄手の杯で、胎は白色を呈する。28は胎が淡黄色、釉が乳白色を呈し、内面、底部は露胎で、瓶を思わせる。29は大形の碗で、高台外部途中まで施釉されている。胎は淡黄色、釉は灰白色を呈する。30は碗で、高台の畳付の部分が平たく、胴部途中まで施釉されている。胎は淡黄色、釉は灰白色を呈する。

染付 (同図25・26)

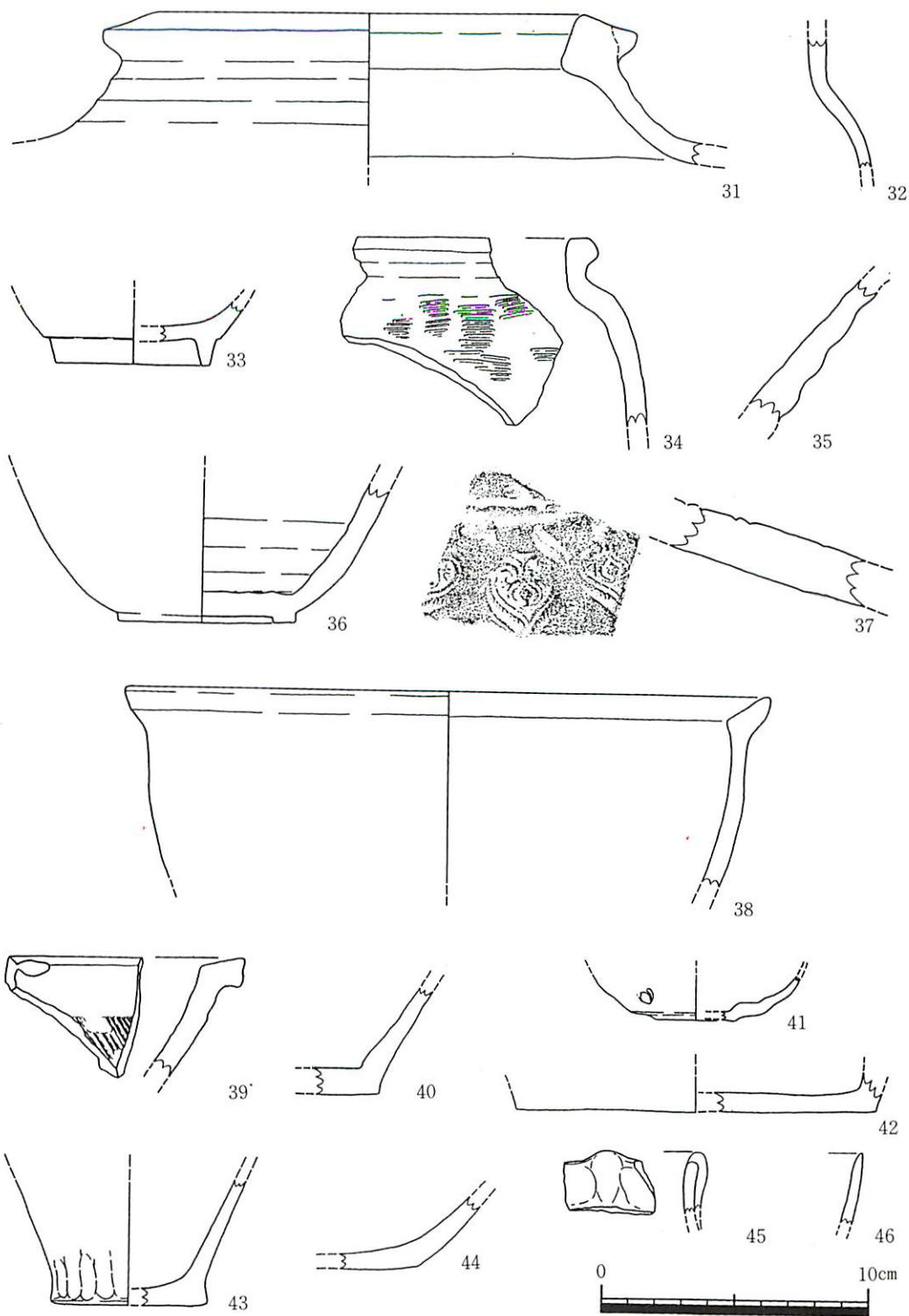
25・26は共に碗である。25は外面に濃紺の丸い文様、内面は口縁部付近と胴部に、器面を巡る帯状の文様をもつ。胎は淡黄色、釉は灰白色を呈する。26は高台内面が斜めに立ち上がる。見込み外縁には、幅約1cmの浅い凹帯が巡り、その一部に黒変が認められる。外面に大小の水玉文様をもつ。胎は淡黄色、釉は灰白色を呈する。 (川俣)

2. 陶器及び土器 (第6図 図版10下・11上)

磁器以外の器物としては、陶器・瓦質土器・陶質土器・土器がある。資料の数量は、表面採集資料が大部分で、出土資料では、Ⅰ、Ⅱa層出土のものが中心である。そのなかで器形を推定できる資料は少数であった。その概要を述べてみると、陶器は、褐釉陶器、黒釉陶器、灰釉陶器に分ける事ができ、褐釉陶器は壺、黒釉陶器は碗、灰釉陶器は壺がそれぞれ器種の中心をなす。一方、瓦質土器は甕、陶質土器は鉢と碗、土器は深鉢と鉢から構成されている。

陶器 (第6図31～37)

31は壺の口縁部破片である。口縁部断面が内外に稜を持ついびつな算盤玉形を呈し、肩の張る大型の壺である。黒褐色の釉が内外器面に薄く均一にかけられており、胎土は鈍い褐色である。口縁は粘土帯を張り付けて外側へ張り出させてある事が、断面より観察できる。35は、31と同類の壺の胴部破片である。鈍い褐色の胎土に、黒褐色の釉がかかっている。内器面には5mm幅、外器面には1cm幅の凹線が観察できる。32は壺の肩部破片である。肩の張る小型の壺形の器形が考えられる。赤褐色の胎土に、暗褐色の釉がかけられている。



第6図 陶器・土器実測図

表採：31・33～38・40～46 X-98グリッド I層：32
 Y-99グリッド III層：39 Z-99グリッド II a層：35

33は碗の底部破片である。高台は削り出しによる。外器面は、胴部より高台にかけて黒色の釉がかけられているが、高台及び高台内は露胎である。内器面は内底部に灰褐色の釉がかかっている以外は露胎である。胎土は鈍い黄橙色を呈する。36は碗あるいは細頸壺の底部破片と考えられる。削り出し高台である。外器面は、胴部より高台にかけて黒色の釉がかけられているが、壺付及び高台内は露胎である。内器面は露胎であり、このことから細頸壺である可能性が強い。胎土は赤褐色を呈する。34は壺の口縁部破片である。肩の張る小型の壺で、口縁の断面はカマボコ状を呈する。全体的に紐づくりであり、肩部に叩き締め、内器面に当て具の痕が観察できる。また、口縁部のみろくろを使って仕上げている。磁化した灰白色の胎土に黄緑色の灰釉がかけられている。

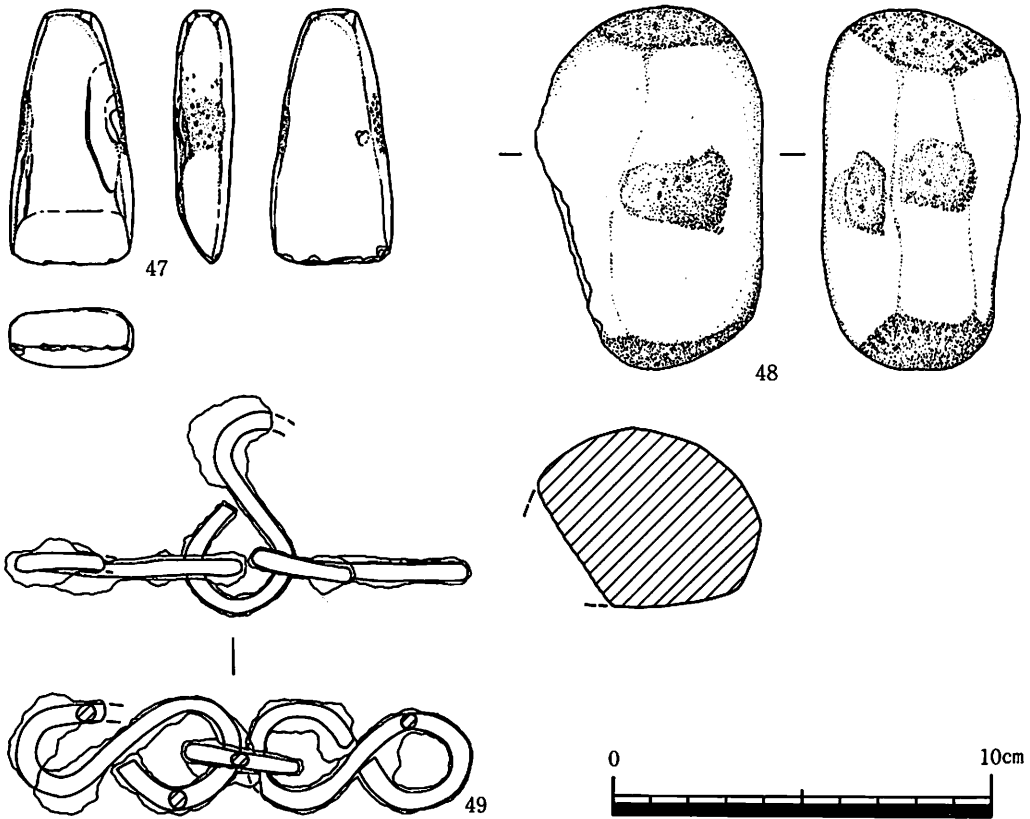
瓦質土器（同図37）、陶質土器（同図38～42）、土器（同図43～46）

37は甕の肩部破片である。篋状工具により2条の凹線を巡らし、更にその周囲にスタンプによるハート形の文様を施している。器形としては、かなり大型の甕形のものと考えられる。他のグスクより出土している瓦質土器は、そのほとんどが手焙としての用途が想定されているが、文様の類例を他のグスクからの出土資料中に求めることができず、その用途については不明である。38・39は鉢の口縁部である。ろくろ成形による硬質の土器で、明褐色に発色している点で共通する。38は胴部から口縁部にかけてやや内湾し、口縁が「く」の字状に開く。39は逆「L」字状の口縁を有し、内器面に櫛目がみられることからいわゆる播鉢であると考えられる。40・42は鉢の底部破片である。ろくろ成形による硬質の土器であるが、橙色に発色している点で38・39と異なる。焼成時の何らかの理由の為か内外器面の色調が異なり、内器面は鈍い橙色となっている。41は碗の底部破片である。ろくろ成形時の引き上げの痕を器面に残す硬質の土器で、灰褐色を呈している。外器面に径4mm程度の豆粒状の粘土が張り付けてあり、装飾を意図したものと考えられる。43・45は深鉢の底部と口縁部の破片である。43の外器面には篋削りの痕跡が認められる。橙色を呈しており、山形に隆起した口縁、くびれをもった底部の特徴から沖縄貝塚時代後期土器に比定できる。44・46は鉢の底部と口縁部の破片である。橙色を呈しており、46は部分的に灰色を帯びている。44の器面は平滑であるが、底部の周縁に6～8mm幅で篋削りを施してある。焼成、胎土からグスク土器に比定できる。

3. 石器及び鉄製品（第7図 図版11下）

石器（第7図47・48 図版11下50）

石斧、敲石、磨石が各一点ずつある。



第7図 石器・鉄製品実測図
 表採：48 Y-99グリッド II b層：47・49

47は磨製石斧である。全体を丁寧に研磨してある小型の片刃石斧で、刃部に僅かな刃こぼれが認められる。側面は部分的に磨滅しており、装着時の紐ずれの痕跡であると考えられる。その形態及び装着痕から、横斧としての使用が推定できる。48は敲石である。全形の約1/4を欠損している。両端及び側面部には敲打痕が観察でき、加えて側面部が平坦になるまで磨られている点から、敲石と磨石との兼用品であったことが考えられる。破損部分もかなり磨滅しており、欠損後もある程度の期間使用されていたことが分かる。

鉄製品 (同図49)

49は鎖金具である。「S」字状の金具が3個体、1つに他の2つが絡み合うようにして接続している。金具のうち2つについては、一部欠損しているものの比較的に残りは良い。その用途は不明であるが、三叉状に紐を繫ぐような用途が考えられるので、鎖金具とした。この形態は馬具の轡部に類似しており、その可能性が全くない訳ではない。

4. 自然遺物

今回、調査区内より採集された自然遺物は、獣骨と貝類に分けられる。獣骨はすべて哺乳類、貝類はその殆どが巻貝で、二枚貝は僅かであった。資料は未鑑定のみであるが、

判明した点を記すと、⁽¹⁾貝類のうち、巻貝についてはイモガイ科に属するものが最も多く、その他にマクラガイ科、リュウテン科（サザエ類）、フデガイ科、イトマキボラ科に属するもの等が見られる。採集資料数は僅かであって、いずれも各層中から分散して検出され、特定の位置に集中する様子は認められなかった。遺跡の立地する地点には、沖縄貝塚時代に属する貝塚の存在も報告されていることから、これらの自然遺物の一部はその貝塚に伴う遺物と解釈される。

（田中）

註(1) 吉良 哲明「原色日本貝類図鑑（改訂版）」保育社 1959年
渡部 忠重「続原色日本貝類図鑑」保育社 1961年

五、まとめ

北谷城の発掘調査は、1984年以来5次にわたって継続的に行われてきており、今回の調査はその第6次調査である。今回の調査は、第5次調査までの知見をもとに想定された二の郭と三の郭の間の門あるいは出入り口の確認を主な目的として行った。以下に今回の調査の内容について簡単にまとめてみることにする。

まず、発掘調査と併行して二の郭を中心として一の郭・三の郭を含めた地形測量を行った。50cm毎のコンターと石垣の区画を同一図面上に併記するという方法を採用して作図を行った。北谷城の石垣は、琉球石灰岩の岩盤と岩盤の間を人口の石垣でつないで自然地形を大きく改変することなく築造されており、今回の測量調査ではこうした特徴をかなりはっきりと図化することができた。今後より広範囲に測量調査を行えば、北谷城の全体構造の把握に重要な資料を提供し得るかもしれない。

発掘調査では、二の郭と三の郭間の石垣の根石列、この石垣外縁から三の郭にかけて人為的に造成されたとと思われる傾斜面と平坦面、及びY-99、Z-99グリッドの石垣外縁から南西方向に延びる張り出し部という遺構が検出された。このうち石垣のW-99グリッド、X-99・100グリッド部分では、石垣の根石の内・外周間に石敷きの平坦面が形成されており、その平坦面の石は磨滅がひどいことから、この部分が一時通路として用いられていたことが想定された。この平坦面から三の郭方向に続く人為的に造成された傾斜面と平坦面の連続によって、二の郭と三の郭の約2.5mの高低差を連結していることから、この部

分が通路であった可能性は高い。しかし、柱穴・礎石などの明確な遺構は検出できず、グスクに本来的に伴う通路であったかどうかは疑問がある。この部分の覆土から出土した遺物には、染付あるいはより後世に下る遺物も含まれ、二の郭の舎殿址出土遺物には染付が見られない⁽¹⁾ことから、グスクがその機能を終えた以後の通路である可能性が高い。また、Y-99、Z-99グリッドで検出された張り出し状遺構については、この遺構が通路と考えられる部分に隣接することは気に掛かるが、石材の用い方も石垣などに比べて非常に脆弱であり、その性格については現在のところ不明と言わざるを得ない。

以上、今回の第6次調査の内容について簡単に述べてきた。それぞれの遺構の解釈については不明確な点も残している。グスクのような大規模な構造物については、小規模な調査では有機的に関連している各遺構の性格の解釈を行うのは困難である。北谷城については継続的に確認調査が行われており、現在では性格が不明確な遺構についてもグスク全体の構造の中で解釈されるようになるであろう。

(岩崎)

註(1) 北谷町教育委員会「北谷城—北谷城第一次調査」1984年
北谷町教育委員会「北谷城展」1989年